〔傳奇作書初篇下〕崇禪寺馬場敵討の實話

寶曆八寅年三月に、淨瑠璃にせし敵討崇禪寺馬場は、作者竹田小出雲、竹田瀧彦なり、今寫本にも畫本にも有て、世によく知れる所也、返り討となりし兄弟が墳墓は、北中島にあり、此實說を去る老人の夜話に聞し所、返り討にあらず、合討にて有しとぞ、生田傳八郎は、武術も鍛練して、さまで卑怯なる武士にもなかりしが、郡山の藩中にて、遠藤宗左衞門を意恨有て討取り、浪華へ來つて谷町弓師丹波方の食客と成て居しが、其頃浪華には、劍術柔術を勵む武士多く、此生田が門弟と成けり、○中略門弟に誘はれ生玉邊へ、傳八郎の出し途中にて、はからず遠藤異本遠城治左衞門に出合ひ、名乘かけて敵を討んと乞ひけれ共、傍には門弟も數多居る事なれば、段々と言なだめ、明後日北中島崇禪寺にてと約してわかれぬ跡にて門弟口々に尋ねける故、傳八郎にも是非なく郡山にての次第を物語りければ、若手の門弟血氣にまかせ、先生のお手を勞さるゝに及ばず、我々が討取んと進むを、段々と申なだめて、曾根崎へ歸りぬ、扨も治左衞門には、石町異本谷町の借座敷にかへり、弟喜八郎に其日の子細を語り、約束の日遲しと待わび、當日崇禪寺馬場へ行けれ共見えず、空敷歸りがけに、丹波方へ催促に行ける、丹波方へもとくより傳八郎の書面來てあり、今日はもだし難き用事出來、明日は相違なく彼所にて勝負を決せんとの文言也、翌日こそ優曇華勝りの敵討と、兄弟諸共に小踊りして、翌日未明より宿を出、長柄の渡場さして行けり、爰に傳八郎日限を延せしは、門弟の銘々面白き事に思ひ、且は後學の爲などと、同道せん事を乞へ共、傳八郎にはまさか兄弟の者を討とて、大勢の門弟を連行んも恥かしとて、此評定に日限一日延しけれ共、達てとのぞんでやまざりければ、是非なく、翌朝門弟の銘々を同道して、渡しを先へ越すより、兄弟も渡しを越へ、勝負にかゝる迄は、大體寫本の通りなれば略す、互に姓名を名のり立合ふ頃は、まだ薄暗き頃にて、人顏も朧に見ゆる計なれば、松影より遠矢にて兄弟共に射て取んと、雨の如くに放しかけた